The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	信多純一氏蔵文政五年書写六段本『天狗之内裏』解題・翻刻
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	詞林. 2006, 40, p. 62-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67559
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

信多純一氏蔵文政五年書写 六段本『天狗之内裏』解題・翻刻

箕浦　尚美

源義経の鞍馬修業時代を題材とした室町物語『天狗の内裏』は、大日如来となった亡父義朝によって義経の未来が語られる場面を含むため、他の判官物との関係でしばしば言及される作品である。伝本は二十本ほどあり、古写本、刊本、十一段本（いずれも『室町時代物語大成』九所収）に大別される。本稿で紹介する信多純一氏蔵文政五年書写六段本は、版本から改作された本である。室町物語の研究においては、近世の伝本が着目されることは少ないが、改作本には改作者の物語に対する読みが反映されており、室町物語を新たに読み直す糸口ともなる。版本以降の改作本に関する問題は、拙稿「『天狗の内裏』版本改作本について―付 実践女子大学山岸文庫蔵本翻刻―」（『語文』八十七輯、二〇〇六年十二月）において、山岸本の紹介と合わせて考察するので参照されたい。

まず、本書の書誌は、以下のとおりである。

文政五年（一八二二年）写。内題なし。左肩打付外題「天狗之内裏」。尾題なし。共紙表紙。袋綴。一冊。縦二八・〇センチ、横一九・八センチ。本文四〇丁。遊び紙無し。片面八行、一行二〇字程度。奥書「文政五年十一月下旬写之／安藤彌五蔵」。表紙に「古志郡福嶋村安藤姓」の朱印（古志郡福嶋村は現在の新潟県長岡市）。裏表紙は日付入りの文書を内側にした反古紙を使用。全体が六段に分けてあり、各段は「扨も其後」（初段）、「斯て其後」（第三段他）などと始まり、「とも中々申すはかりはなかりけり」（初段他）などと結ばれている。

本文を検討すると、『天狗の内裏』伝本のうち、寛永正保（一六二四―四八年）頃の丹緑本（慶應義塾図書館所蔵本他、『室町時代物語大成』所収）を改作したものであることが分かる（『語文』八十七輯所収拙稿参照）。細かい文辞の出入りは多数あるが、やや目立つのは、仏教的要素の追加である。特に、経文を仮名で引用する箇所が多いため、まずその典拠を確認しておく。

①法花経の五の巻大ばばんに曰、おせつなきやうほつぼだいしんとくふたいてんの御経にまかせ、せつの如く修行すれは女人成仏疑ひなし。（19オ）

「於刹那頃。発菩提心。得不退転。」（『妙法蓮華経』巻五提婆達多品第十二）[1]

②只一帖の正法を悲法罪の輩は、たいさんのひゆほんに、にゆあひこくの金言にて、かゝる地獄の苦患を、受無量永劫にも責盡ぬ呵責なり（23オ）

「其有誹謗　如斯経典　見有読誦　書持経者　軽賤憎嫉而懐結恨　此人罪報　汝今復聴　其人命終　入阿鼻獄　具足一劫　劫尽更生　如是展転　至無数劫」（『妙法蓮華経』巻二譬喩品第三）

③只願いて大じやう経典のじゆじしてないしふじよきやう一げ仏説の如く修行すれは未来共に成仏する（29ウ）

「但楽受持　大乗経典　乃至不受　余経一偈」（『妙法蓮華経』巻二譬喩品第三）

④いはうへんりき四十四年みけんしんじつしやうじきしやはうべん、たんせつむしやうたうのきんげんにかない、（38ウ）

「種種説法以方便力。四十余年未顕真実」（『無量義経』）[2]

「正直捨方便　但説無上道」（『妙法蓮華経』巻一方便品第二）

ほとんどが『法華経』からの引用である。『無量義経』は『法華経』の開経であるため、これも『法華経』関連の文句と捉えてよい。信多本には、『法華経』に関わる記述がこの他にも見られる。例えば、餓鬼道地獄で悦ぶ餓鬼がその理由を説明する場面には、

我等七世の孫、娑婆にて今壱人出家をとげ正法修行明らかにして貴き僧にて候へは六親眷属九族の為にて千部の法花経讀誦あり、かゝる御経の功力にて此苦患をまぬかれて娑婆世界へ生て成仏しきたうの道に至るの嬉しさに、扨こそ悦ひ申也。（20オ）

とある。他本には『法華経』の功徳だとは記されていない。又、大日如来の未来語りのうち、義経の前世が鼠であって頼朝坊や景時坊等の経を食ったために現世で梶原景時に殺されるという因縁譚には、

三世先に置ては箱根の寺の出家也しが、紙付法花経を五百部書んと大願を立、斯の如く書留て箱根に籠てありけれと、師□恩愚かに思ふのみか数の寶を盗取て廿七才にて空敷成り、身欲の罪に責落て鼠と生を請る也。去なから過去生に法花経書写の功力によりて只今汝は牛若と生をなす。（37オ）

という三世先の話が加わっている。いずれも、『法華経』の功徳を説いたものであり、改作者は特に『法華経』を意識していたと考えられる。

『天狗の内裏』は、地獄巡り、仏教問答、因縁譚を含む作品であるので、このように宗教性を高めようとする改作者がいるのは十分に納得できるところである。しかし、この物語は、大日如来が牛若に仇討ちを命じるという、仏教的倫理に反する内容も持っている。そのため、宗教性を求める立場の

者には、その解決が求められる。それについては、信多本では、義朝は大日如来の仮の姿であったと述べる事に依って解決している（31ウ）。このような形を取ることによって、大日如来の威厳を損なうことなく、義朝や義経の行為に正当性を与えたと言える。

以下に、信多純一氏蔵文政五年書写六段本『天狗之内裏』を翻刻する。

「ハ」「カ」など、片仮名で表記されている文字もあるが、小字の片仮名以外は平仮名で記した。墨滅に依る訂正箇所は、訂正後の文字を記した。虫損に依る判読不能箇所は□で示した。また、私に、句読点、「」を加えた。濁点は原文に依るものである。誤字は多くあるが煩雑になるため注記していない。

信多純一先生には、本書の閲覧と翻刻許可を賜るとともに、『天狗の内裏』について大阪大学の卒業論文以来、御指導を賜った。心よりお礼申し上げます。

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

（みのうら・なおみ　国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究員）